

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その17）

～「ミニバスケットボールの今昔 ⑤」～

2020年5月吉日

広島県バスケットボール協会U12部会

スーパーバイザー 大庭浩資

1.1 ジャンプボール

今の試合では、ジャンプボールは試合開始だけ（他にいくつかのケースがありますがごく稀）です。またヘルドボールになると、ジャンプボールシチュエーションにより、各チーム交互でボール保持となります。

しかし当時は、ヘルドボールになる（あるいはジャッジが不明な場合等）たびに、その現象があった近くのサークルで、ボールを奪い合った選手によるジャンプボールが行われました。例えば、身長170cmの選手と130cmの選手が、ゴール下でボールを奪い合った場合、その二人で、フリースローラインを挟んだサークルでジャンプボールを行うこととなります。170cmと130cmの選手では、なんだか不公平に感じられるでしょう。

でも当時は、このジャンプボールが戦術的に大きな意味を持っていました。次のジャンプボールは自チームが勝つのか負けるのか、勝つのなら、あるいは負けるのならどうポジションをとるのか、ボールがタップされた後どう動くのか、選手は瞬時に判断し行動しなければなりません。当時はそのための練習もメニューの中に入れていました。

しかし、ヘルドボールのたびに試合が止まり、近くのサークルに移動し、ジャンプボールで再開。審判のトスアップもまっすぐ上がらない場合もありやり直す。当時はそれが当たり前でしたが、今となっては、なんと無駄な時間を費やしていたものかと考えさせられます。

その点今は、より公平でとてもスピーディーですね。

1.2 選手起用

今でも選手の出し方は作戦として重要ですね。自分のチームに自信があれば、試合展開をしっかりイメージしながら選手起用ができます。でもそんなチームは一握り。多くのチームのコーチが、相手チームのことを考えながら、また自チームの実情を考えながら、選手起用には頭を悩まされていることでしょう。それは今も昔も変わりません。

さてその選手の出し方ですが、当時の選手起用は、多くのチームにおいて、Aチーム、Bチーム、Aチーム、Aチーム（または、A、A、B、A）の出し方が主流でした。

でもこれはこれで面白かったです。30秒ルールがなかったので、Bチームはひたすら時間稼ぎをするチーム。7ファールを有効に活用し、Bチームはひたすら厳しいディフェンスをするチーム。オールコートプレスディフェンスをするため、Bチームはひたすら走り続けるチームなどなど。その時その時で、コーチも選手も一生懸命だったのですね。

1.3 チーム数

今はミニバスがとても盛んになり、多くのチームが存在します。役員として微力ながら仕事をしてきた私にとっても、とても嬉しいことです。

本年度も4月末現在、広島地区だけでも、男子32チーム、女子38チームが登録しています。広島県全体では、どれくらいのチームが存在するのでしょうか。

さて当時とは言う、県大会ですら参加チームは、男女各20チーム程度でした。もちろん地区予選などありません。ですから大会初日が男女4会場ずつで行われ、2日目は男女一緒に1会場で準決勝・決勝が行われました。すべて純粋なトーナメント制で、1回戦で負けたら終わりでしたから2日でできたのですね。

では全国的にはどうだったのでしょうか。

分かりやすい例として、1984年に、私がコーチとして初めて全国大会に出場したときのことを紹介しましょう。大会では神奈川県代表の横浜のチームに勝ちましたが、試合の後、『月刊バスケットボール』の記者に取材を受けた時の始めの質問は、「神奈川県代表は、県で400チーム、横浜市だけでも200チームの中を勝ち抜いたチームですが、そのチームに勝った気持ちはいかがですか？」ですから、広島県のチームがいかに少なかったかが分かると思います。ちなみに、この質問に対してびっくりしたことは覚えていますがなんと答えたかは覚えていません。

またそれから6年後、2回目の全国大会出場が決まった翌日の新聞記事には、『県大会は男子は30チーム、女子は27チームで行われた』と書かれていますから、6年間でもそんなに増えていないのが分かります。

それから考えると、今は本当にチーム数が多くなったと思います。

さて、先ほど述べたように、県大会は純粋なトーナメント制でしたから、抽選会も異様な雰囲気でした。多くのチームがシードチームや実力のあるチームの横に入ったら、1回戦負けが濃厚。また逆に、シードがなくても実力があるチームがシードチームの横に入ると、シードチームは大変。シードチームが1回戦敗退もありうるのです。それだけ試合の組み合わせは、今とは比べられないほど重要でした。チームの代表者が、数字の書かれた割りばしを引き、それが発表されるたびに指導者の皆さんは一喜一憂。いきなり1回戦が事実上の決勝戦という年も何度かありました。逆に運も実力のうち。くじ運の良さで準決勝まで進み、中国大会の出場権を手にするチームもあり、それはそれでトーナメント製の醍醐味でした。

また会場はすべて広島市の小学校でした。前述したように純粋なトーナメント制でしたから、広島市のチームに限らず、遠く呉市や福山市から県大会に参加したチームも1回戦で敗れたらたった1試合で帰宅。その姿を見るのは、とても辛いものがありました。

この状況を何とかしたい、試合数をなるべく多く確保してやりたいという指導者の願いが、現在の地区予選での敗者復活戦やいろいろな大会での敗者同士の交歓試合につながっているのです。今は試合数が多く、大会運営が昔より大変ですが、これからも選手の喜ぶ姿や満足した顔を見ることを励みに、指導者一同、頑張っていきたいものです。